

タイガーマスク現象 全国へ



「伊達直人」を名乗る人物からランドセルなどが贈られる動きは全国に広がっている＝広島市

助け合いへの共感 増幅 「新しい公共」考える契機に

西田 亮介

東洋大講師
(公共政策)



にしだ・りょうすけ 1983年生まれ。中小企業基盤整備機構リサーチャー。社会起業家や大学発ベンチャー企業などを研究。シンドス・ジャーナル(ウェブマガジン)で連載中。

2010年12月25日、前橋市の児童相談所にランドセル10個が届けられた。送り主は不明。過去の人気漫画『タイガーマスク』の主人公「伊達直人」を名乗る人物の手紙が添えられていた。事態はこれにとどまらなかった。全国で、「伊達直人」を名乗りながら児童養護施設などにお金や物を届けるという「事件」が同時多発的に起きたのだ。この善意の連鎖は何を意味するのか。

一連の出来事の新しいきは、匿名による寄付の連鎖と早い拡散にある。前橋市の件がマスメディアに取り上げられたあと、わずか1カ月の間に同種の匿名寄付が瞬く間に広がった。送り主の名をインターネットで人気があるキャラクターの名前にしたもののや、品物の種類を少しずつ変えるといった派生形もあった。微小な差異の連鎖は、インターネットでは日常化したコミュニケーションの形式でもある。この傾

向は、ツイッターやユーストリームといったソーシャルメディアが急速に普及したことで、ジャーナリズムやマーケティングのあり方などオンラインの世界にも広がりをみせている。これらを念頭におく今回の出来事は、日本的な善意が、オンラインのネットワークのもたらした新しいつながりや欲求によって増幅された事件ととらえることができる。

日本人的な善意とはなにか。匿名で、つまり、自らの営利行為とは無関係に支援を行う「粋」なあり方である。日本では、篤志家たちによる寄付も、あるいは、募金箱にそっとお金を入れる「草の根の寄付」も、そのような形が中心であった。こうした寄付が機能するために、助け合いを支える共感の存在に対する信頼と、寄付を仲介する団体への信頼という二つの信頼が前提となる。これらは近年失われ

かかっているといわれており、不況のおおりの情報公開の遅れなどから後者は苦戦しているとも聞く。だが今回の一件は、前者がこの社会に意外と根強く残っていることを示唆した。政治の世界には今、民主党が提示した「新しい公共」と呼ばれる、国民の共助を推進していく流れがある。寄付改革も粗上(こまごま)に上がってはいないものの、残念ながら寄付控除と「パブリック・サポート・テスト」(寄付をうけるNPO法人の認定基準)の見直しが議論の中心で、一般の人々を巻き込む議論にはなっていない。しかもそこで議論されているのは、実名で、寄付者の営利にもつながら欧米型の「ドネーション」などと呼ばれる方法が中心である。むしろ欧米型の寄付の導入と既存制度の修正も重要だが、人々は新しい寄付の手段を求めている。そのひとつの力は、匿名で寄付

を行うことができるインターネットサービスの活用と普及にあるのかもしれない。日本にも、個人の挑戦と寄付をネット上で結び付ける「Just Giving Japan」といったサービスがある。NPO法人チャリティ・プラットフォームが提供しているもので、個人が「子どもを支える団体への寄付を集めたいので私はマラソンに挑戦します」など宣言し、共感する人々がネットで寄付をする仕組みだ。また、バナー広告をクリックすることで募金できる「クリック募金」も生まれている。民間と政治が連動すれば、大きなインパクトを持つ。現状では「新しい公共」は、民間発の「新しさ」をまだ十分には取り込めていないが、潜在的な可能性はある。今回の善意の連鎖を、日本の公共をとらえ直すきっかけとし、国民を巻き込む寄付や社会参加の新しい方法を考えたい。

を

を